チョーサー作「鳥の議会」における鳥達について

小　林　絢　子

“長年にわたり、東京家政大学英語英文学科と同大学院文学研究科英語英文学専攻において、学生・院生のみならず、私達教員もお導き下さった加須屋先生・倉持先生・小出先生への感謝の意を表し、この拙文を捧げます。”

Geoffrey Chaucer (c.1340-1400) の「鳥の議会」(*The Parliamentof Fowls =PF*) にはたくさんの鳥が登場する。中世英文学では花や鳥は中世絵画において取り扱われているのと同じくらい随所に登場するが、文学作品の中ではこの作品ほど鳥がまとめて描写されていることは少ない。チョーサーは詩人として多作であったばかりでなく、職業人として宮廷の官吏、税関の役人、林野官、王室関係工事監督などさまざまな経験をし、なおかつ百年戦争の時代の宮廷人の常として、フランスやイタリアに外交使節として出かけていったり、或いは戦いにいって捕虜になったりしている。そのような経験から得た知識の他に法学院 (Inner Temple) でラテン語、フランス語、天文学、薬 (草) 学、医術、博物学、錬金術など幅広い教養を得たとされる。そのように広範囲に自然科学や博物学を学んでいることはマルチ人間の多かった時代としても驚くべきことである。そしてそれらの知識を詩作にあるいは散文に巧みに生かして使っていることにも感心する。今回はその中で彼の鳥類に対する関心に焦点をあててみたい。

「鳥の議会」はチョーサーの40才頃の作品で[(1)]他の作品と同じくframework storyの形式をとっている。舞台設定すなわち枠組みである序文は重厚で長く、実際の鳥の議会が始まるのは　この詩の半分が過ぎてからである。序で

はまずキケロ(Marcus Tullius Cicero: BC 106-43)の「スキピオの夢」(*Somnium Scipionis*)が出てくる。スキピオはthe younger Africanusとも呼ばれるローマの将軍で第3次ポエニ戦争(BC 149-146)で活躍した後アフリカのヌミディア(Numidis)に行き、そこで義父のアフリカヌスの夢を見た。チョーサーはその夢を長々と紹介している。アフリカヌスはスキピオに公共の福祉のために常に勤勉に働くように、とか反対に、もし律法を破ったり、好色な欲望を持ったりすれば、その者は死後ずっと地球の周りを苦しみながら廻るという運命を免れないというお説教をしている。そこにみられる「諸行無常」の精神をチョーサーは"syn erthe was so lyte,/And ful of torment and of hard grace, That he ne shulde hym in the world delyte."(*PF* ll. 64-66)と書いている。この考えはこの詩の冒頭で「愛」について知りたがっている作者がいくら思い悩んでも本当の愛については知りがたいと嘆いている姿勢と通じるものがある。書物は愛というものはlord and syre(君主であり、主人である)と教えてはくれるものの、愛の神キューピッドによって踵を射られた者の幸せは短かく、その苦しみのほうが長く辛いとチョーサーは繰り返し他の作品で述べている。この世では良いことは長く続かない、運命の輪は巡るものである、というのである。そのような事を考えつつ、いつしか詩人チョーサーは眠ってしまい、今度は自分自身の夢を見た。

夢の中で彼はアフリカヌスによって公園の門の所へ連れてこられ、更に奥の緑の庭に来た。そこには甘い香りの花々の他に緑の木々、明るい草原、冷たい小川や、健康に良い薬草があり、美しい鳥の歌声が聞こえた。泉の下の木のそばにはキューピッドと召使い達がいた。彼が歩を進めてそびえ立つ館に入っていくと、擬人化された「平和」、「忍耐」、「約束」などの女神達がいて、その向こうにプリアパス(Priapus)王が所在なげに王座に坐っていた。奥にはヴィーナス(Venus)が門番の金持ち達を従えて坐っていた。その又奥の壁画の詳細はチョーサーの他の詩にも出てくる古今東西の英雄達についての描写なので省く。そこから元の草原に戻ってようやく彼は一人の女神が

坐っているのに気がついた。彼女が「鳥の議会」を主宰する「自然の女神」であった。

その日は聖バレンタインの日[2]でたくさんの鳥が自分の伴侶を選ぶためにそこに集まっていた。その席順は決まっていて、高い所に猛禽類,次に虫類を食べる小鳥達がいて、種をついばむ鳥達は草原に、水鳥達は最も低い所に坐っていた。女神自身は全ての美徳を備えていると言われる雌ワシを手にとまらせて中央に坐っていた。寺院の上にとまっていた数百のつがいの白鳩(ME dowve; ModE doves) (l. 237) 以外ではワシが最初に紹介される鳥である。そして雌ワシの伴侶選びがこの会議の中心的課題となっている。雌ワシには3羽の雄ワシが求愛したが、それぞれが自分の愛の正当性を主張して譲らない。以下、カッコウ、キジバト、ガチョウ、ハイタカ、カケス等々30種類余りの鳥が時に譲り合い、時に威嚇しあい、おのおのの知恵をかたむけて議論する。それは人間社会の当時の宮廷風恋愛という形式と滑稽で皮肉な実践的愛情の両方の要素を織り交ぜた恋愛論になっている。

議会に集う鳥達は …The foules of ravyne/Weere hyest set, and thenne the foues smale/That eten, as hem Nature wolde enclyne,/As worm or thyng of which I telle no tale ;/And water-foul sat lowest in the dale;/But foul that lyveth by sed sat on the grene/And that so fele that wonder was to sene. (*PF* II. 323-395) と述べられているように大体4種類にわかれていて、猛禽類が最高位に位置し、次に虫などを食べる鳥、種を食べる鳥がそれぞれ中間の地位ということになり、水鳥は地上で暮らすせいか、最下位となっている。次に登場する各鳥達の一般的特徴と作品の中での描写を比べてみる。

猛禽類の中でもワシとタカは王者の風格を持っている。ワシ(egle, tercelet; eagle)[3]はwith his sharpe lok perseth the sonne (l.331) と言われるほど鋭い爪を持ち、他の身分の低い種類のワシを周りに従えていた。オオタカ (goshauk; goshawk) はこげ茶色と灰色の羽を持ち、大食漢で小さな小鳥をいじめていた。粗暴な行動ゆえに彼は虐待者 (tirant; tyrant)

と呼ばれている。タカの一種であるハヤブサ（faucon; falcon, peregrineともいう）は王の手をとまり木とする鳥でgentylと修飾されている。ハイタカ（sperhauk; sparrowhawk）は雄のほうが雌より小さいが、ここではhardyといわれているので雄が出席しているのであろう。ヒバリをしばしば追撃するマーリンことコチョウゲンボ（merlioun; merlin）もいる。

猛禽類以外で目立つのはけたたましい叫び声をあげる鳥類である。優しい目をしたハト（There was the douve with hire yen meke; l.341）がいる。ハトは世界中にいて種類も多い鳥であるが、欧州にいるのはring doveまたはwood pigeonだという。doveとpigeonの間にはっきりした区別はないようである。翼と首の周りに白い斑点があるのでturtle-doveと呼ばれるキジバトはこの議会に夫婦で出席している。誠実（trewe; true）な鳥だと賞揚されている。カササギ（pye; magpie）よくさえずるのでおしゃべり（janglynge）な鳥の代表である。同じカラス族のベニハシガラス（chough）はタゲリ（lapwynge; lapwing）と共に嘘つきで、前者は泥棒、後者は裏切り者（ful of trecherie; l.347）とされている。タゲリは金切り声で鳴くのでその音から別名pewitあるいはturwitともいう。チョーサーの使っているlapwingという語はOE hleapan 'to leap' とwinc 'to totter' の合成語なので、その場合は「よろよろ跳ねる」という動作からきた命名といえる。カケス（jay）もまたおしゃべりな鳥として有名であるが、ここでは軽蔑屋（skornynge l.346）と呼ばれている。アオサギ（heroun; heron）は別名シラサギともいい、餌としてウジ虫や軟体動物、魚などを好むが、チョーサーはそれを「ウナギの敵（the eles fo, l.346）」と表現している。サギ（heron）の一種であるツル（crane）は所によってはコウノトリ（stork）とも呼ばれ、臆病で優雅に歩く鳥の代表であるが、チョーサーはそれを「トランペットの音を持つ巨人」（The crane, the geaunt with his trompes soun, l.344）といって鳴き声の点だけを取り上げている。コウノトリはこの詩の後の方に29番目の鳥として取り上げられていて、その役目は「不義の仇を打つ」事（The stork, the wrekere of avouterye; l.361）だという。隣の枝にとまっているカラス

(crow) は不吉な声で鳴く (the crow that croaks his care, l.363)。そばにはワタリガラス (raven) がいる。ここにはワタリガラスの声や形への言及はなく、ただ資質が「聡明」(wys) だと評されている。猛禽類の中で最後(全体としては17番目) に出てくるのはトビ(kite) である。これはワシタカ科に属するが、性質は貪欲、狡猾とされ、シェイクスピアの「ハムレット」や「リア王」にも出てきていて、そこでもイメージは良くない。ここでは「臆病者」(coward) とされている。

鳴き声が美しいことで有名なナイチンゲール (nyghtyngale; nightingale) は「新しい緑の葉をよびおこす」鳥 (the nyghtyngale,/That clepeth forth the grene leves newe; II. 351-352) といわれている。時を告げるオンドリ (kok; cock) 即ち「小さな村の日時計」(the kok, that orloge is of thorpes lyte; I. 350) と併せて英国ののどかな田園風景を彷彿とさせる。その隣に並んでいるスズメ (sparwe; sparrow) はただ「ヴィーナスの息子」(Venus sone l.351) と呼ばれていて、John Skelton のいう "Philip Sparrow" のイメージは薄い。"Cuccu Song"(c. 1250) で有名なカッコウ (cukkow; cuckoo) は「春の使い」ともいわれ、年に 1 ないし 2 回卵を生むが、他の鳥の巣に卵を生むという図々しい一面があるらしく、ここでは「不人情」(unkynde) ということになっている。春の野といえばツバメ (swalwe; swallow) は欠かせないが、ここでは「鮮やかな色の花から蜜を作る小さい蜂を殺す者」(morthere of the foules smale/That maken hony of floures fresshe of hewe; II. 353-354) と恐ろしい。恐ろしいといえばフクロウ (oule; owl) も死の予言者 (The oule ek, that of deth the bode bryngeth; I. 343) である。チョーサーの「善女伝」にも不吉な予言をする鳥として登場している。「フクロウと夜啼き鳥」ではけたたましい声で議論をふっかけるし、不消化物を吐き出して巣を汚くしておいたりして、フクロウは悪い鳥ということになっている。他によく歌う鳥としては ウタツグミ (throstil; throstle) という古くからおなじみ (old) の鳥、その隣の霜時 (frosty) にやってくるツグミ (feldefare; fieldfare) がいる。歌はうたわな

いが、話し上手なオウムは（popyn jay; parrot）は“ful of delicasye Ⅰ. 359）といわれているがdelicasyeの意味はチョーサーの作品の中でも様々な解釈があるらしく、ここでは‘wantonness’即ち「気まぐれ」ということになっている[4]。

羽根が美しい（The pekok, with his aungles fetheres bryghte Ⅰ. 356）と作者が賞揚しているクジャク（pekok; peacock）は「カンタベリー物語」の家扶の話の中では高慢で陽気である点が粉屋に似ているとされている。キジ（fesaunt; phesant）は地味な鳥で虫を食べる鳥類に属するが、この議会では「夜中になると（メンドリを寝取って）オンドリを侮辱する」（The fesaunt, skornere of the cok by nyghte Ⅰ. 357）ということになっている。その他にやはり虫を食べるムクドリ（stare; starling）がいる。この鳥はオウムのように人間の口まねをするといわれているせいかチョーサーは「人の秘密をもらす鳥」（The stare, that the conseyl can bewrye Ⅰ. 348）と評している。その隣に坐っているコマドリ（ruddok; red-breast又はrobin）はかわいい声で鳴くのでこの詩ではthe tame ruddock（Ⅰ. 349）と修飾されている。

水鳥は身分の低い鳥といわれているが、ハクチョウ（swan）だけはギリシャ神話時代から聖なる鳥とされていた。しかしチョーサーはこの議会でこの鳥をワシやオオタカについで7番目に出しているにもかかわらず「死が近づくと鳴く用心深い鳥」（the jelous swan, ayens his deth that syngeth Ⅰ. 342）といって次にくる死の予言者のフクロウと同じ扱いにしている。家禽類の代表はこの詩ではガチョウ（goos; goose）である。雌のガチョウの主張は後述するが、その姿形は描かれず、ただthe waker goos（Ⅰ. 358）としてその抜け目のなさに注目しているだけである。ニワトリは時を告げる鳥として述べたがその事はシャンテクレールの話にもでてくる。雄アヒル（drake; wild duck）は仲間を殺す鳥（The drake, storyere of his owene kynde I. 360）である。大食い（hot in his glottony I. 362）のウ（cormeraunt; cormorant）はしばしばその貪欲さで人間や物事の飽くなき欲望の象徴とさ

れるが、この議会では行動も発言もしていない。

以上が標題の鳥達のすべてであるが、物語のほうは冒頭に述べた雌ワシの獲得について、3羽の雄ワシが論争するという展開で進められている。3羽それぞれが立派な求愛のことばを述べる。どんな苦しみに耐えてもメスワシの愛を得て永続させるという決心である。中でも最も身分の高い第1の雄ワシは簡潔明瞭にしかも宮廷愛の作法に則して「自分を生かすも殺すも雌ワシの心次第だから、慈悲と好意をかけてくれるように」(The formel…/Whos I am al, and evere wol hire serve,/Do what hire lest, to do my lyve or sterve. II. 418-420) と願う。他の2羽も同様の主張をする。しかし「自分の方が長く雌ワシを愛しているのだから」自分を選んでくれ (I… lenger have served hire in my degre./And if she shulde have louved for long lovynge,/To me ful longe hadde be the guerdonynge. II. 453-455) とか、自分の方が「誠実な男」(hire treweste man I. 479) という程度で説得力に乏しい。その後4種類の鳥の代表がそれらの主張に対して意見を述べる。

猛禽類代表である雄のハヤブサは第1の雄ワシに加勢する。第1の皇帝ワシは「騎士の中で最も位の高い、騎士道を最も長く実践している」というのである。(Me wolde thynke how that the worthieste/Of knyghthod, and I lengest had used it,/Most of estat, of blod the gentilleste, were sittyngest for hire. II. 548-551) それに反し、水鳥代表の雌のガチョウは、雌ワシが雄ワシを愛していないなら、雄ワシは別なワシを見つけなさい、(But she wol love him, lat hym love another I. 567) と忠告する。しかしその意見はすぐに種を食べる虫代表である雌のキジバトによって反駁される。彼女は「愛人は永遠に愛すべきである」(Though that his lady everemore be strange,/Yit lat hym serve hire ever, til he be ded. II. 584-585) と言う。最後に食虫鳥代表のカッコウが、3羽の論争が長く続いて終わらないようだったら、ワシは一生独身でいなさい、(Lat ech of hem be soleyn al here lyve. I. 607) と一喝する。

「自然の女神」はこれらの議論をきいて「相手が自分の選択に同意した時のみ」夫婦になれるのだ、("But natheles, in this condicioun/Mot be the choys of everich that is heere,/That she agre to his eleccioun,/Whoso he be that shulde be hire feere. 407-410) と念を押し、更に忠告として「理性」(resoun) を働かせるように、という。そして更に理性に従えば、ハヤブサと同じように第1のワシ(皇帝の雄ワシ)を選ぶようになるとさえ言う。それを聞いて雌ワシは1年間の熟慮期間を願い出て許可される。他の鳥はそれぞれ伴侶を得て翌年の再会を楽しみに旅立つ。

このようにこの詩は「鳥の議会」に座を借りた人間社会の恋愛の疑似法廷ともいえるものである。当時は恋愛も自分の属する階級の中で相手を選ぶことが順当と考えられていた。そして王族・貴族の間では相手の女性の同意を得るために騎士が研鑽をつむということが賞揚された。その姿勢を鳥の社会が模倣しているのである。中世の身分社会の常として、関心の中心が位の高い(とされる)鳥(ワシ)の恋愛に限られていること、それについての意見も身分別に分かれた鳥の代表だけが述べていること、しかもその代表が非常に観念的な意見しか述べていないという点が読みようによってはあきたらない。しかし、各鳥の生態についてチョーサーが修辞学の伝統に沿いながらもこのように細かく観察していること、鳥の種類や人間との親疎にとらわれずすべての鳥を親しみをもって扱っていることが鳥中心に調べてわかったのであり、このことは花鳥風月や風俗習慣等の描写が個々の例の羅列になることが多くてとかく平板になりがちな中世の詩の読解に利する結果をもたらしたと言えるだろう。

註

(1) Robinson, F. N. Ed., *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, Oxford Unviersity Press, 1986, pp. 309-310. Benson, Larry D., Ed., *The Riverside Chaucer*, Houghton Mifflin, Boston, 1987, p.994

(2) バレンタインの日に鳥の議会が開かれるという設定については次のような根拠もある。*Encyclopedia Americana*: International Edition, s.v. St. Valentine's Day : The sending of love notes on that date arose in the late Middle Ages and appears to have been accidental. The most plausible of several theories relate it to the medieval European belief that birds begin to mate on that date.

(3) セミコロンの前はロビンソン版(註1)における綴り字、後は現代英語である。

(4) Davis, Norman, *Chaucer Glossary*, Oxford at the Clarendon Press, s.v. delicasye.